

学校、家庭、地域が一体となった人権教育の総合的な取組の在り方の実践事例

1. 基本情報

○市町村教育委員会名

芦屋町人権教育総合推進地域事業実行委員会

○推進地域名

芦屋中学校区

○推進協力校の概要

(平成30年5月1日現在)

<芦屋町立芦屋中学校> 13学級 (うち特別支援学級2学級) 全生徒数: 396名
<芦屋町立山鹿小学校> 14学級 (うち特別支援学級2学級) 全児童数: 330名
<芦屋町立芦屋小学校> 9学級 (うち特別支援学級2学級) 全児童数: 196名
<芦屋町立芦屋東小学校> 8学級 (うち特別支援学級1学級) 全児童数: 193名

○調査研究のテーマ

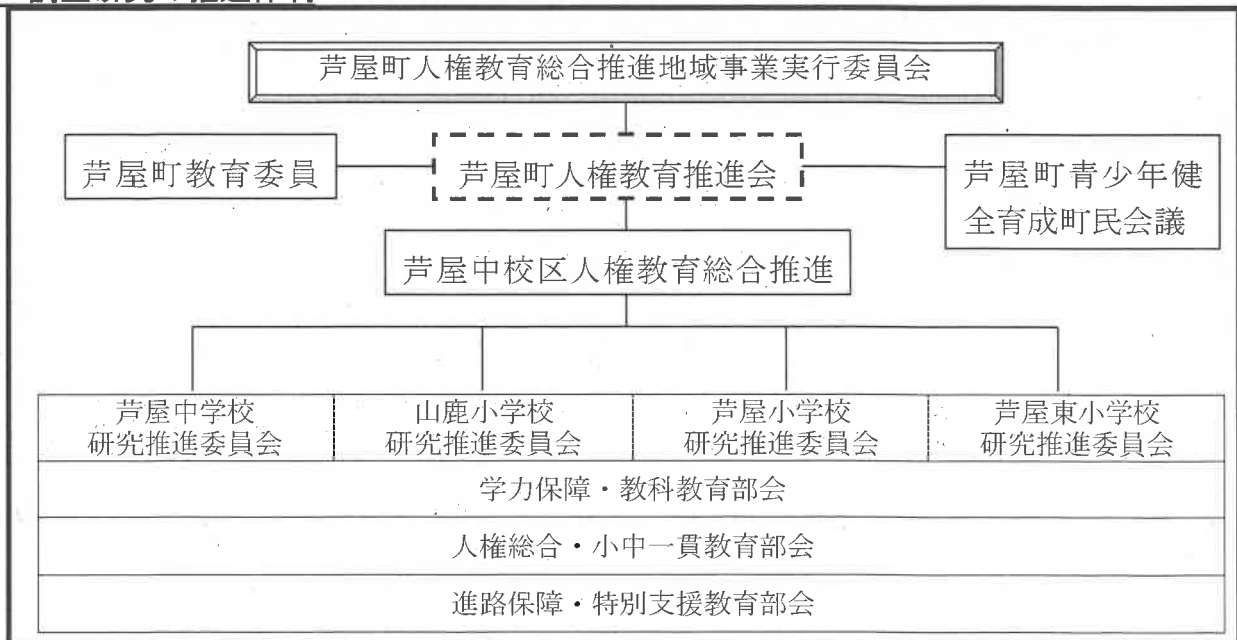
「未来を切り拓く生きる力を身につけた児童生徒の育成」
～開かれた学校を拠点にした家庭・地域・関係機関との人権ネットワークの活用を通して～

2. 調査研究のテーマを設定した背景

平成28、29年度に本事業に取り組んだことで、これまでの町の施策である「さわやかプロジェクト」にもとづいた人権教育を、家庭・地域・関係機関との連携を明確にして推進することができた。

平成30年度は、これまでの取組の成果と課題を分析し、取組を継続・改善するとともに、新たに「自尊感情の高揚」や「労働観や職業観の育成」をねらった「しゃべり場」の実施や、地域への誇りを育むために地域を活用した教科横断的な学習等に取り組んでいく。これらの取組によって、地域の文化や教育力を生かした人権尊重の地域づくりを進め、「芦屋の子どもは芦屋で育てる」を合言葉に、確かな人権認識を身に付けた次代の地域(まち)づくりを担う人材を育てるため「未来を切り拓く生きる力を身につけた児童生徒の育成」を目指す。

3. 調査研究の推進体制



○実施方法・検証・評価

①成果

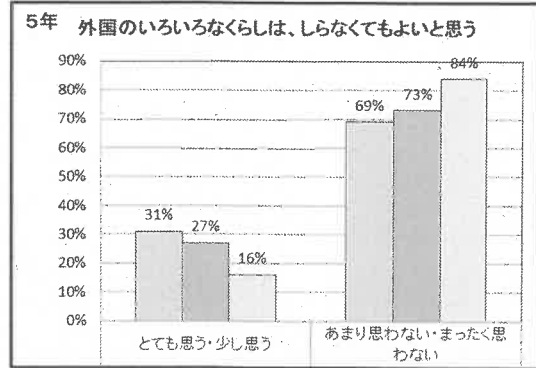
○外国人に関する3つの体験活動を位置付けた総合的な学習の時間と道徳科、教科との関連を図った学習モデルが作成できた。

○児童人権意識調査（価値的・態度的側面、技能的側面）の結果からも、本事業により児童の意識の変容が明らかになった。7月から2月まで取組を行った5年生を中心に述べる。

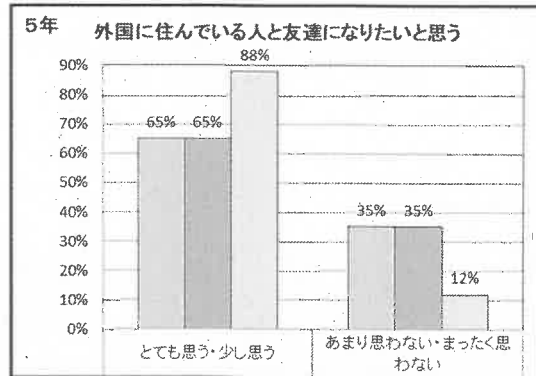
右のグラフは、5年生児童の変容を表したものである。人権意識調査結果①からは、3つの体験活動を重ねるにつれて、外国の暮らしについて知りたいという意欲が高まっていることが分かる。また、人権意識調査結果②からは、2月に大きなポイントの上昇が見られた。これは、1月の中国以外の国の方との交流や2月の次年度の中国姉妹校訪問等に向けた中国語を話したり書いたりする活動を機に、自分から関わろうとする価値的・態度的側面がより一層育まれたからだと考えられる。以上のことから、3つの体験活動を中心とした取組は有効であったと考える。

②課題

- 本年度作成した総合的な学習の時間を軸とした年間指導計画に特別活動も位置付ける。
- 体験活動の学習過程、発問やワークシート等をさらに検討する。



【人権意識調査結果①】



【人権意識調査結果②】

4. 調査研究の内容等

○現状の分析と課題

全国学力学習状況調査の児童生徒質問紙における項目で、本町では調査開始以来、全国平均と比べ低い状況が続いている項目がある。それは「自分によいところはあるか」という項目と「朝食を毎日食べている」という項目である。また、高い数値が続いている項目は「携帯やスマートフォンの使用時間の長さ」である。学力に視点をあてると基礎的基本的な内容の習得に関する A 問題の正答率については、教科や領域によっては全国平均より高いものはあるが、基礎的基本的な内容を活用して問題を解く B 問題は全国平均より低い状況にある。また、学力の2極化が顕著であり低学力の児童生徒の人数も多い。さらに本校区では、様々な理由による不登校・不登校傾向の児童生徒が毎年いる状況にある。これらのことから本町の教育課題は「自尊感情の低さ」、「基本的生活習慣の確立」、「学力」であることが分かる。課題克服のために、児童生徒の内面や家庭・地域での生活も含めて丁寧に分析し、具体的な手立てを講じるとともに、その背景にあるものを把握し、実態を引き起こす要因を解消していく取組を進める。

○調査研究の内容

①「校種間の連携」について

- 芦屋町内全小中学校の日々の授業実践において、児童生徒の人権感覚を育成するために、クローバープラン（芦屋町授業づくり資料）、北九州教育事務所人権・同和教育室作成の「人権が尊重される授業づくり10の視点」、「環境づくり10の視点」の活用を進める。また、hyper-QU検査の研修を通して豊かな人間関係づくりの手立てを構築する。
- 児童生徒の学力保障・進路保障のため、教科教育部会において、「小中一貫教育ジョイントカリキュラム」の実践及び改善を進める。
- 4校共通の着眼のもと、授業改善を進める。
 - ・人権感覚の育成のために、単元学習のまとまりを「見通す」・「考える・分かる」・「できる」の3つに整理した芦屋型学習過程を踏まえた単元構成の工夫を図る。
 - ・1単位時間を「つかむ」・「つくる」・「広げる・深める」「まとめる・（つかう）」と設定し、個に応じた指導ができるよう「つくる」段階に「一人学び」、自他のよさを認め合うことができるよう「広げる・深める」段階に「協同学び」を位置付ける。
 - ・思考力を高める授業の在り方について協議する授業交流会で授業に係る指導案審議を実施する。

②「学校と関係機関等との連携」について

- 学校や家庭・地域における諸問題について関係機関との連携を図り、児童生徒にとって適切な対応を考え実践する。
- 「芦屋町人権まつり」や「青少年の主張大会」等、関係機関と連携しながら「人権のまちづくり」を進める。

③「学校、地域、家庭の連携」について

- 町青少年育成会や区長会に協力依頼し「地域の一員としての自覚」を育んだり「進路選択における判断」の参考にしたりする「しゃべり場」を実施する。また、地

域の方を招いた「合同音楽祭」を実施する。

- 地域への誇りを育むために地域の方や外部機関の方々を活用して町の文化遺産を調べたり作成したりする教科横断的な問題解決型学習を設定する。
- 学校通信に「家庭学習の手引き」を掲載して家庭学習の大切さを啓発したり、家庭と連携した「家庭学習強化週間」を実施したりして家庭学習の定着を図る。
- 中学校卒業後の進路を見据え、「進路適性検査」や職場体験等を関連させた進路学習（キャリア教育）を進める。
- 「芦屋町さわやかプロジェクト」リーフレットを全家庭に配布し、学校教育活動の理解や支援を依頼し地域全体で子どもを育てていく気運を高める。

○実施方法・検証・評価

「校種間の連携」・「学校と関係機関との連携」・「学校・地域・家庭の連携」の実施の成果について、「hyper-Q U検査の結果」・「シビックプライドのアンケート結果」から考察する。

【人権感覚の育成】（「hyper-Q U検査の結果」から）

[学校生活意欲]

小学校学校生活意欲プロフィール	町6月	町12月	全国
友だち関係	10.2	10.4	9.9
学級の雰囲気	10.5	10.6	9.7
学習意欲	9.1	9.1	9.5

※各項目3つの質問に4件法で回答した数値

中学校学校生活意欲プロフィール	町6月	町12月	全国
友だち関係	17.2	16.9	17
学級との関係	14.7	14.3	13.8
学習意欲	15.1	14.3	14.8
進路意識	15.2	15	14.6

※各項目5つの質問に4件法で回答した数値

[学級満足度]

小学校学級満足度	町6月	町12月	全国
学級生活満足群	42	55	39
非承認群	27	25	18
傷害行為認知群	12	6	18
学級生活不満足群	19	14	25

(%)

中学校学級満足度	町6月	町12月	全国
学級生活満足群	53	46	37
非承認群	21	18	17
傷害行為認知群	10	14	15
学級生活不満足群	16	22	31

(%)

学級生活満足群	学級内に自分の居場所があり学校生活を意欲的に送っている児童生徒
非承認群	いじめや悪ふざけは受けていないが学級内で認められることが少ない児童生徒
傷害行為認知群	いじめや悪ふざけを受けているか、他の児童生徒とトラブルがある可能性が高い児童生徒
学級生活不満足群	耐えられないいじめや悪ふざけを受けているか、非常に不安傾向が強い児童生徒

「学校生活の意欲」に関しては、「友だち関係」と「学級の雰囲気」についてもほとんど全国より高い数値である。「学級の満足度」では小中学校とも「満足群」が全国より10ポイント以上高く、「学級生活不満足群」では、10ポイント以上低い数値であった。これは、クローバープラン（芦屋町授業づくり資料）、北九州教育事務所

人権・同和教育室作成の「人権が尊重される授業づくり10の視点」、「環境づくり10の視点」の活用を進めたり小中学校の授業交流会を通して日常の授業改善が進めたりすることが児童生徒の「学校生活への意欲」の高まりや「友だちに配慮し思いやる」気持ちを育むことができたと考える。

【地域との関わり】（シビックプライドアンケート）

項目		小5	小6	中3
①「あしや」のよいところを見つけることができたか。	とても	41.6	44	58
	だいたい	46	45.7	33
	あまり	10.6	10.3	7
	ない	1.8	0	2
②地域の人々の町への思いが分かったか。	とても	39	54.6	59
	だいたい	41.6	37.4	32
	あまり	15.9	8	8
	ない	3.5	7.2	1
③地域の方からほめられてうれしかったか。	とても	39.8	28.6	53
	だいたい	25.7	44.4	33
	あまり	16.8	23	11
	ない	17.7	4	3
④「あしや」のよさをまとめたり、発表したりしたか。	とても	20.3	14.3	12
	だいたい	14.2	38	18
	あまり	26.6	29.4	24
	ない	38.9	18.3	46

項目		小5	小6	中3
⑤これからも「あしや」の行事を続けてほしいか。	とても	69.1	70.6	76
	だいたい	23	27	21
	あまり	4.4	2.4	2
	ない	3.5	0	1
⑥「あしや」のまちの行事や体験活動に参加したいか。	とても	38.9	34.9	41
	だいたい	38.1	44.4	36
	あまり	15	17.5	16
	ない	8	3.2	7
⑦気持ちをこめて校歌を歌うことができたか。	とても	49.5	36.5	52
	だいたい	35.4	52.4	35
	あまり	12.4	11.1	11
	ない	2.7	0	2

①～④は「地域への気づき・発見」、⑤～⑦は「地域の一員としての自覚・愛

着・主体性」を意図して設定した項目である。

①～④については、学校にゲストティーチャーで来られた方や地域の施設に従事している方との交流を通して、「あしやのまちのよさや地域の方の思いがわかった」ことの数値が高かったと考える。また、⑤～⑦についても「あしやの行事を続けてほしい」や「あしやの行事に参加したい」という項目の数値は高い。4月に実施された全国学力学習状況調査の「地域の出来事に関心があるか」や「地域の行事に参加しているか」の数値と比較すると12月に実施した本アンケートの方がかなり高い数値である。これは、「芦屋町人権まつり」で「青少年の主張大会」に参加したりボランティアとして運営に携わったりしたことや「しゃべり場」や「合同音楽祭」の実施等により様々な形で地域の方とのふれあう機会が多かったことに起因していると考えられる。また、hyper-QU検査の「中学校学校生活意欲プロフィール」の「進路意識」の項目では、全国の数値より高く、「シビックプライドのアンケート」結果においても高い数値を示している。これは、地域の方とふれあう体験活動を深化・補充する「進路コンパス」（進路適性検査）における自己の適性把握等を通して、キャリア教育の目標である基礎的・汎用的能力が高まったと考える。